

宮本瓦全の研究

高 木 茂 登*

I. はじめに

穏やかな広島湾に注ぎ込む太田川の河口デルタに築かれた広島町の町は、海に開かれた立地条件を生かして発展してきた。その海の玄関口にあたるのが宇品港である。広島を中心街から港に向かう途上、宇品地区に入っただけ、バス通りに面しているとはいえ、そこにある小公園を気にとめる人は今は少ないかも知れない。しかし、ここが宇品港を築造した千田貞暁の功労を記念する千田廟公園なのである。

木々に囲まれた公園には新しい遊具を備えた遊び場もあるが、よく見ると全体的には古めかしい由緒ある気配が漂っている。少し奥まったところには小さな祠堂（社殿）があり、中央には立派な石組みの基壇が築かれた上に、高い石の台座が据えられ、その上にかつての典型的な偉人の銅像がそそり立っている。千田貞暁の像である。広島市内では珍しい戦前の野外彫刻であるこの像の制作者として知られるのが宮本瓦全である。

瓦全は広島彫刻界の先駆者ともいわれながら、千田貞暁像以外に今日まで遺されている作品がほとんど無いためその芸術の全体像は捉えにくく、後にチューブ製作の事業で成功したとも伝えられるがやはり資料も乏しく、その実像はあまり知られていないといえない。ここでは、この度得た情報を加え、宮本瓦全の生涯をもう一度たどり、その幅広い足跡と果たした役割について考えてみたい。



① 千田廟公園に立つ千田貞暁像

II. 生い立ち

宮本瓦全は、明治4（1871）年7月7日、宮本亥三二（1839～1903）の次男として、広島市大手町筋六丁目（現中区大手町3丁目）の宮本邸に生まれた。本名は、二七郎。父亥三二は『愚翁道話』⁽¹⁾の著述で知られる心学者宮本愚翁である。祖父の中村徳水（1800～1856）も、江戸心学中興の師とまでいわれた高名な広島藩の心学者であった。石田梅巖を始祖とし、江戸中後期に隆盛した儒学にもとづく人生哲学の社会教化運動でもあった石門心学の衰退期にあつて、その復興に心を砕いた心学者の家系といえる。「われもまた人なり」と、身分に関係ない普遍的な人間性の自覚を促し、より広い視

* 美術科

野から道義を説いたと考えられるこの学派のヒューマニズムともいべき精神や、厳格な自律心はおそらく幼い二七郎の心にも受け継がれていったに違いない。

二七郎は3歳で縁家の井原家の養子となったことになっている。井原家は中村家に養子入家した祖父徳永の実家で、父亥三二の兄が養子後継していたところ病歿し、家名を残すための名義上の措置であったと思われる。こうして暫くは井原二七郎を名のることになる。ちなみに父亥三二も中村家から宮本家に養子入家した身であった。家系存続のための養子が一般的だった当時、この三家の縁家の密接な関係が想像できよう。

父亥三二が遺した『宮本愚翁日記』⁽²⁾の記述からは、明治11(1878)年9月に広島師範学校附属小学校に入学したことや、父親の二七郎の教育への力の入れようがうかがえるが、少年二七郎について詳しいことはあまりふれられていない。ただし、後の小伝⁽³⁾には「天性絵画手工などを好み、小学校時代に既に群を抜いていた」とあるように、美術に対する豊かな才能の芽生えが早くからあったことは確かなようである。やがて小学校卒業後、広島県広島中学校(後の広島県立広島第一中学校、現在の広島国泰寺高等学校)に入学したが、旧制中学校制度初期の当時は学業厳しく、卒業する者はごくまれで、大部分の生徒と同じく中退したようだ。広島県尋常中学校(広島中学校)3年修了とだけ記録したのものもあるが、⁽⁴⁾その後豊田郡忠海高等学校副科(後の広島県立忠海中学校)で中等教育を修めたとの記述もある。学者の家系の環境からくる学問への責務と、自己の適性を見極めようとする葛藤がおそらくはこの頃あったのではないだろうか。そして、二七郎は自己の能力を生かすべく美術家への道を選んでいったと思われる。

Ⅲ. 美術学校

折しも、明治9(1876)年創設の工部美術学校(後の工部大学校にあたる工学寮の附属学校)が種々の事情から明治16(1883)年廃校になった後、明治政府は新時代の美術家を育成すべく官立の美術学校を新たに創設しようとしていた。明治22(1889)年2月1日に開校した東京美術学校(現在の東京芸術大学)がそれであるが、その第1回入学生65名の一人として、二七郎は入学を果たしたのであった。18歳の彼は最年少の方で、既に画塾などで経験を積んだ者も多く、下村観山や横山大観、大村西崖、白井雨山など優れた人材が少なからず名前を連ねていた。他に、もう一人の広島出身者である六角紫水(当時は藤岡注多良)もいた。4歳年長の紫水は卒業と同時に母校の教官となり漆芸家として名をなすが、同郷で、同じ苦学生であった彼らに交友関係があったとしても不思議ではない。

美術学校の修業年限は普通科(基礎課程)2年、専修科(専門課程)3年の5年制であった。家産豊かというわけではない二七郎は始めから苦学は覚悟の上であった。それも、2年目に入る明治23年2月から、神田にある輸出金属商「三河屋」に食客として住み込み、夜間だけ輸出金属の図案に従事し、食事はもとより、学校の授業料のほか毎月五圓の手当てが得られるようになり、学資のめどがつくようになった。

3年目からの専修科では絵画科(日本画)・彫刻科(木彫)・美術工芸科(金工・漆工)のいずれかの専門に分かれることになる。二七郎は三河屋での仕事の関係上、金工に進もうと思っていたようだが、おそらく勧められて、彫刻科を専攻したのだった。東京美術学校は、維新以来の急激な欧化主義のもとで衰滅の危機に瀕した伝統美術の創造的復興をめざしたフェノロサや岡倉天心らの主導で創設に到ったため、絵画科では日本画、彫刻科では木彫の教育という国粹的な内容の傾向であった。彫刻科を担当したのは象牙彫出身の竹内久一、石川光明、それに江戸仏師の流れをくむ高村光雲らであった。

なかでも光雲は、伝統的な木彫技法に写生にもとづく西洋的な写実味を加えて新境地を開き、明治26(1893)年のシカゴ万博に意欲作「老猿」を出品し見事妙技2等賞を受賞するなど油ののり始めた

頃である。ましてや2期目（第1回入学生のうち、年長の16名は1年早く専修科に進んでいた。）にあたる専修科同期の彫刻科生徒は二七郎を含めて僅か2名（1期目の彫刻専攻生も、大村西崖と白井雨山の2名）であったから、懇切な指導に恵まれたことが推察されよう。

東京芸術大学芸術資料館に卒業制作として2点の二七郎の作品が所蔵されている。⁽⁵⁾ 木彫「西王母像」と木彫レリーフ「寒山拾得」である。いずれも伝統的な木彫技術を駆使し、中国に題材を得た人物像を丹念に彫出したもので、当時の美術学校の教育を反映したものといてよく、その生真面目な修得ぶりがうかがえる。木彫家として活躍する準備は整ったというべきだろう。

ただ後の二七郎の活躍の幅の広さを考えると、在学中の出来事としてもうひとつふれておく必要があると思われることがある。それは「楠公銅像」と「西郷隆盛銅像」の制作である。「楠公銅像」は明治23年住友家から東京美術学校に制作依頼があり、光雲を制作主任として学校総出で作ったものである。日本最初の銅像「大村益次郎銅像」（明治26年完成、靖国神社内）が工部美術学校出身の大熊氏廣によって既に制作進行中であつたが、「楠公銅像」は巨大な騎馬像で、しかも原型が木彫ということとさらに世間の注目を浴びた大事業であつた。文字どおり、美術学校教員生徒総出の制作で、当然二七郎も手伝つたに違いない。木型の完成が明治26年、皇居に運ばれ天覧に供されたという。さらに鑄造され皇居前に設置されたのは明治33（1900）年のことであつた。

上野公園の「西郷隆盛銅像」もこの頃べつに美術学校に制作依頼があり、光雲の木彫原型によって、明治31（1898）年に竣工したものである。いずれも銅像の設置まで見届けられなかったものの、これらの制作現場に居合わせ、直接関わりもした二七郎の経験が、後の彼の銅像制作に深く結び付いたであろうことは確かなことだろう。

IV. 献納品

明治27（1894）年2月5日、所定の課程を修めた二七郎は他の21名の生徒とともに東京美術学校第2回卒業生として卒業する。いうまでもなく、前途ある彫刻家としてなお東京に留まって、研鑽を続けたいというのが本人の願望であつたろう。しかし、前年の10月に宮本家の嗣子で義兄の観太郎（「広島日報」編集長を経て当時、広島県会書記長。36歳）が急死したことによって、それもままならぬ事態となった。遺された家族のことが二七郎の肩にかかってきたからである。

卒業間もなく、二七郎はなかば失意のうちに帰郷した。井原家から復家して名前も宮本二七郎に戻つた。そんな彼のために尽力してくれる人達がいて、巖島に彫刻の講習所を開設する計画が持ち上がった。しかし、この年の春頃から騒然としていた朝鮮半島の状況がにわかに緊張を増し、遂に8月には日清戦争が勃発し、広島は兵站基地として繁忙を極め始め、計画は頓挫してしまつた。出ばなをくじかれた二七郎は再び上京したが、またしても三河屋を頼るほかなかつた。幸いにも以前の手当の倍で、勤務は夜間のみ、昼間は自分の仕事をしてよいという優遇を得た。9月には広島に大本営が移された。

しばらくするうち、彫刻の仕事にも恵まれ始めた。この頃、アメリカから師の高村光雲のもとに日本間を装飾する8枚の欄間の制作依頼があつた。その仕事を光雲は二七郎に任せてくれたのである。喜んでこれに従事して完成させ、三百六十圓もの謝金を受けたという。次に今度はさらに名誉な注文が飛び込んでくる。広島市から陛下への献納品の制作である。大本営が設置され、帝国議会も開かれるなど広島が一時的にしろ首都的役割を果たした市民の光栄を記念してのものである。

明治28（1895）年の夏に突然広島に呼び戻され決定されるや、すぐさま下絵の制作から彫刻へと取り掛かり、郷里で精魂込めた制作を続けることになる。完成したのは明治30（1897）年の夏であつた。献納品は横九尺（約270cm）縦七尺六寸（約210cm）の衝立で、「戦時の宇品港」と「大本営当時の広島城」の図柄を桂の木に浮き彫りしたものである。完成した衝立は市会議事堂で5日間市民に公開さ

れ、連日千人を越す見物人でにぎわったと当時の新聞は伝えている。⁽⁶⁾その後、献納された衝立を御嘉納された明治天皇は宮内省から広島市に一千圓を下賜されたともあり、⁽⁷⁾彫刻家として大いに面目を施したのだった。

V. 職工学校

献納品の完成後、再上京への強い意志にもかかわらず、結局二七郎は家族扶養のため、広島に留まらざるを得なかった。そこで、明治30年に開校したばかりの広島県職工学校（後の広島県広島工業学校、現在の広島県広島工業高等学校）の教諭になることになった。ところが、広島県広島第一尋常中学校（後の広島県広島第一中学校）の図画教師に推薦した友人が赴任せず、後任をさがして決まるまでの間（明治31年4月～11月）、自分が代わりに中学に勤めた後、ようやく県職工学校に奉職した。

職工学校は当時まだ全国に数校しかない新時代を担う技術者養成のための学校である。広島卒業者の中には、戦前世界的なレベルにあった呉海軍工廠で活躍した者や、さまざまな工業生産の新分野の開拓者となったものも多いと聞く。美術学校彫刻科第1回卒業生の白井雨山も、卒業後石川県と同様の学校に奉職した後、母校の教官に戻っている。二七郎にとっても自分の技能を生かせる場所として納得しての選択であったろう。

当時の職工学校には木工科（指物工・彫刻工）と金工科（板金工）があり、木彫・板金・用器画・彫刻の設計・制作などを主に教えたようだ。卒業生が自伝の中で次のようにふり返っている。⁽⁸⁾

学科目は幾何・物理・化学・用器画・機械製図等があり、（中略）板金工科では漏斗・如雨露・油差し・金盥・薬罐の打出し物などを作った。とにかくこの学校では実習に重きをおき、また機械製図・用器画・自在画などは中等学校に不釣り合いのような高度なものを教えられた。（中略）宮本先生は決してしからず、良く教えてくれたが、生徒にやらせながら指導する、いわば自主性・個性を引き出すような教育だった。

職工学校の授業内容や、木彫ばかりでなく美術学校での基礎修練や三河屋での経験から金工や描画の指導にも腕を振るい、当時八百屋さんと呼ばれた二七郎の幅広い指導ぶりや温厚な人柄がうかがえよう。江戸期の広島藩で行われ、当時百年ぶりに復興されたといわれる銅虫（鍛造の銅製品）も手がけたとも伝えられ、その旺盛な好奇心と器用さ、また熱心な研究態度などが後の多面的な活動に発展していったものと考えられる。

ほぼ十年間、草創期の広島県職工学校の基礎がために尽力した二七郎は、明治42年（1909）年には奈良県吉野実業（工業）学校の校長となって栄転する。しかし、吉野での生活がどのようなものであったか詳しく伝えるものは何もない。二年後の明治44（1911）年の12月、二七郎は俸給生活を突然やめて、上京したのだった。既に父宮本愚翁は明治36（1903）年に病歿し、養育していた甥たちも東京の学校に進み将来のめどが立ち始めていたこともあったろう。とはいえ、宿志を貫くべくとあり、彫刻家として再び立ちたいと願っての一大決心であったことは想像できる。東京では明治40年に文展（文部省美術展覧会）が開設され、美術が華々しく世間の注目を浴びるようになり、彫刻部門では東京美術学校に明治32（1899）年に設けられた彫塑科（西洋塑造）出身の若い彫刻家の活躍が目立ったり、高村光雲ら恩師に加えて、白井雨山なども審査員として活躍しているのを聞き及ぶとじっとしていられなかったのであろう。時に二七郎、四十歳の暮れであった。

VI. 銅像制作

上京すると、友人らは口を揃えてその無謀を嘲り、「二十年来在京しているものすら食えない有様なのに、いまさら上京して何をする積もりか」と忠告され、事態はそう甘くないことを間もなく思い知らされた。仕方なくそれでは彫刻より工業方面で道を開こうと、色々と算段してみるものそんな



② 船越 衛像 (大正元)

其よく相似たるに感嘆せざるものはあらざりき」と記している。¹⁰ 人間性をも見事に捕えた写生の妙が光る作といえるだろう。因みに制作者名が宮本瓦全と紹介され、この頃から瓦全の号を正式に使い始めたことがわかる。

「船越像」制作後間もなく、瓦全は本郷駒込神明町（現在の文京区本駒込四丁目）に大きなアトリエを構え、次の依頼に備えた。当時はまだ銅像の建造も少なく、それに従事する彫刻家もそれほど多くはなかった。とはいえ、明治洋風彫刻の先駆者といえる大熊氏廣や藤田文蔵、それに長沼守敬、新海竹太郎、また東京美術学校教官の高村光雲、山田鬼斎、白井雨山、黒岩淡哉、岡崎雪聲、そして美術学校出身の本山白雲、渡辺長男、水谷鐵也、武石弘三郎、朝倉文夫、北村西望ら有力な彫刻家がこの分野でも腕を振るっていた。そんな中で宮本瓦全も銅像制作者として活動を始めたのである。

最初は神奈川県庁門燈の原形制作などで凌ぐうち、愛国婦人会の創始者である奥村五百子女史の銅像の注文があり、大正2年10月には完成させた。この東京麹町の愛国婦人会構内に設置された「奥村五百子銅像」も前掲書『偉人の倂』の写真図版によると、やはり確かな技量を感じさせる追真の写生像であることが窺える。

VII. 千田貞暁像

銅像作家としての地位を固めた宮本瓦全のもとに來た次の依頼が、やはり広島からで、今日まで広島に遺る千田貞暁の像であった。

薩摩藩出身で、明治政府の内務官僚として活躍した千田貞暁と広島との結びつきは、明治13(1880)年に彼が広島県令(明治19年から知事と改称)として着任した時に始まる。千田知事は県勢振興のため多岐にわたる施策に実効をあげたが、なかでも陰陽道連絡道路(広島一島根)の建設と宇品港築港は特筆すべき業績といわれる。特に宇品港築港については、起工にこぎつけるまで反対運動を起こした住民を熱心に説得したり、着工後もたびたびの風水害に工事の崩壊や喪失をこうむり、人夫不足や材料費高騰にも直面し事業は困難をきわめたという。しかし、知事の熱意は衰えず遂に5年3カ月を要した末、明治22(1889)年工事を完遂させた。資金不足を補うため私財を投じたとも伝えられ、文字どおり心血を注いだ知事畢生の大事業であった。千田貞暁は築港完成後、新潟県知事に転任、以後各地の知事を歴任して明治31(1898)年退官。その後男爵、貴族院議員にあげられ、明治41(1908)

に簡単なものではない。困っていたところ、思いかけず広島から、船越衛の銅像の制作依頼が舞い込んできたのだった。

船越衛は、広島藩出身では数少ない貴重な維新の功労者で、明治政府の内務官僚として各県の知事を歴任し、貴族院議員に任じられ、男爵を授けられた郷土の偉人である。しかも二七郎としてはまだ当時としては珍しい屋外に設置される銅像の初めての制作とあって、力を込めて取り組んだことは間違いない。まだアトリエを持っていなかったので友人の工場を借り受け、明治45(1912)年の春から着手して、秋には像の原型を完成させ、鑄造されて広島市饒津神社境内に設置除幕されたのは、大正2(1913)年11月のことだった。

この「船越衛銅像」は現存せず、昭和3年に出版され、当時全国にある銅像を網羅した『偉人の倂』⁹に掲載された写真図版によって辛うじてその像容を窺うと、フロックコートを着て穏やかな表情で静かに立つ人物像である。除幕式の模様を伝える当時の新聞は「生けるが如く」と形容し、「男爵と銅像とを見比べて

年東京に歿したのであった。

ところで、宇品港は難工事の末落成したにも拘らず、当初十分に価値が認められず、無用の事業との批判もあった。しかし日清戦争後、軍用港として大きな役割を果たすことになり、広島その後の発展のもととなる重要な事業であったとやがてみなされるようになったのである。同時に、千田知事の功績の偉大さをたたえる声も高まり、記念碑建立の計画が起こった。ようやく明治40（1907）年、現在の広島市南区宇品御幸1丁目に公園敷地が整備され、次いで明治45年には記念碑基壇も造営されていたのだった。

そこで郷土出身の彫刻家で既に「船越衛銅像」でその技量の確かさも実証済みの宮本瓦全という適任者を得て、いよいよ銅像建設が実現する運びとなったのである。制作の経緯は何も伝えられてはいないが、銅像制作にある程度の経験を積んだ瓦全は、ひそかな自信と周到な計画でこの像の制作を進めていったことだろう。大正4（1915）年11月3日、遂に千田知事の銅像は除幕された。¹¹ 像はフロックコートに身を包み、右手に築港の図面を握り締め、工事の様を見渡す千田知事の堂々たる立ち姿である。豊かなひげをたくわえ年齢を刻む落ち着いた風貌からも、難事業をなし遂げた不屈の精神を読み取ることができ、在りし日の千田知事を彷彿とさせる優れた肖像彫刻といえるのではないだろうか。



③ 千田貞暁像（大正4）

この後も銅像制作の依頼は続き、宮崎県延岡の「内藤子爵壽像」や愛知県の「森田明棋翁銅像」、東京小塚原の「観臓記念碑」などを制作したと伝えられる。「観臓記念碑」はおそらく明和8（1771）年に千住小塚原で杉田玄白・前野良沢らが囚人の死体の腑分け（解剖）を観察した記念碑と思われ、また別の興味も引くが、今のところいずれも詳しいことはわかっていない。



④ 山縣豊太郎像（大正11）

広島関係で、その後に設置されたものとしては「山縣豊太郎銅像」・「佐藤正銅像」・「早速整爾銅像」などがあげられる。いずれも郷土出身で功績のあった人物たちの肖像である。山縣豊太郎はわが国航空発展史の草創期に活躍し、大正9年23歳の若さで墜落死した民間飛行士で、像は大正11年に広島市鶴羽神社に建てられた。佐藤正は日清戦争などでの武勲で陸軍少将までのぼった名高い軍人。やはり大正11年に広島市明星院（饒津神社に隣接）にその像は建った。また、早速整爾は地元紙芸備日日新聞社長をつとめ、衆議院議員としても活躍し、農林・大蔵大臣も歴任した政財界の有力者で、大正15年大臣現職で歿し、昭和4年広島市比治山にその像が建立されたのだった。

残念ながら、それらの像のいずれも現存せず、間近に観察することはできない。ただ、「山縣豊太郎銅像」と「佐藤正銅像」はやはり前掲書『偉人の傍』の写真図版でおおよそ、その像容は偲ぶことができる。航空帽をかぶり航空服に身を包む、飛行士姿の山縣豊太郎像。片足を失ったにも拘らず將軍の正装に身を固め、謹厳に直立する佐藤正像。年齢・風貌・服装とも相違はあるもの

の、そこには共通する静かで穏やかな感覚が見てとれる。ことさら大きな身ぶりも、誇張も理想化もなく、ごく自然に本人がそこに立っているという雰囲気である。これは、他の瓦全の作品にも共通する彼の特質とっていいものかも知れない。

だが、宮本瓦全の制作した銅像がなぜこれ程までに遺されていないのか。「千田貞暁像」以外は、ことごとくが設置場所から消えているのである。特に広島に戦前立っていた像に関しては、その行く末を直感的にあの苛烈な原爆禍と結びつけてしまいそうである。しかし事實は、太平洋戦争のさなかに、これらは他の幾百もの銅像とともに、国の統制のもと強制的に撤収されていったのである。これは昭和16（1941）年から始まった金属回収令によるもので、軍需物資確保のため、あらゆる家庭・施設から鉄及び銅製品が回収されたのである。¹² 更に徹底強化された翌年からは、神社・寺院・教会も例外でなくなり、「貴重な美術品や由緒深い品でも国家の緊急の要請は、経済的、文化的価値を超越する至高なものである¹³」として、寺の梵鐘などとともに、各地の銅像もほとんどが弾丸や軍艦になるために回収されていったと伝えられる。年月日は特定できなかったが、広島にあった瓦全制作の銅像もこうして無くなったことがほぼ確認できた。これも形を変えた戦争の犠牲といえるのではないだろうか。かたや「千田貞暁像」だけがなぜ残されたか不明だが、もちろん偶然ではないはずで、その貴重さを今一度痛感せざるを得ない。

VIII. チューブ製作

自作の銅像の行く末を知っていたはずも無いわけだが、宮本瓦全は銅像制作のかたわら、一方で工業方面への関心を強めていくのである。彫刻と工業がどうして結びつくのか現代の感覚では理解しにくい。青・壮年期を明治年間に生きた瓦全にとっての彫刻はもう少し異なっていたと思われる。近代的な芸術観が日本に紹介され始めたのはようやく大正初期に入ってからである。おそらく瓦全をここまで導いてきたのは、純粋に個人的あるいは芸術的動機というより、自分の得意とする技術によって新国家建設に貢献したいという、明治の人によく見られるまっすぐな情熱であったろう。生来器用でもの作りを得意とし、好奇心も強い彼が金属を扱う新しい分野に挑戦したとしても不思議なことではない。

大正5（1916）年、以前から関係していた輸出金属商「三河屋」などの発起で東京金属株式会社が創立され、その技師長を任された頃より、その新しい方面への可能性は広がっていったものと思われる。間もなく大正7（1918）年には独立して、金属容器の製作を開始したのだった。この金属容器というのが、金属チューブのこと。あの絵の具などが入っている搾り出し式のチューブ容器のことである。

なぜチューブなのか、そのきっかけについては次のように伝えられている。¹⁴

あるとき絵を描きながらフトしたことに気付いた。当時の絵具はすべて輸入品で英国製のものが多く、しかもチューブ入りで使うにも便利であった。「チューブというものは絵具ですらこんなに便利なのだ。他にもっと用途があるはず。何とかこれを作れな



⑤ 佐藤 正像（大正11）



⑥ 宮本瓦全

いものか」たちまちにして金属製チューブのトリコとなり、大量生産のための努力と苦労がはじまった。

美術家の目が、小さなチューブを見だし、それまで日本では作られなかったものを国産化する道を開いていったのである。板金などを手がけ冶金的な知識や経験があったからこそ「作ってみよう」と思ったにせよ、その発想は新しく開拓者精神にあふれている。

最初は大星卯三郎という型工（鋳型専門の職人）と二人で協力してこの事業を始めたので、社名を二人のイニシャルを取って、当時としては珍しいアルファベット入りの「オーエム金属容器製作所」としたそうで、ここにも宮本瓦全の進取の気性が窺えよう。しかし何よりも、金属の加工法としては極めてユニークな工法（現在専門的には「衝撃押出加工法」と呼ばれている）を独力で段階的に研究開発して、わが国で初めてチューブ製作を行ったことは高く評価されることなのである。油絵具に関していえば、当時イギリスのニュートンやフランスのルフランなどとすべて輸入品であったものが、国産のチューブが出来て、初めて国産の油絵具の登場が可能となったのである。¹⁵ 日本のチューブ入り絵具の隠れた生みの親が宮本瓦全であった。ここでも間接的だが、美術界に大きな貢献をしたといえよう。ところが、経営的には原料に錫を使うのでコストが高がつき、当初は舶来品に圧倒されて思うようにゆかず、結局1年余り後には独力での経営となった。

おそらく大正9（1920）年頃、「宮本製作所」として独立してからも研究に余念のない日々が続いたであろう。暫くしてその成果があって、改良を加えた独自のチューブ製造工法を開発し、経営的にも軌道に乗せることができるようになった。その頃から、絵具だけでなく、糊や歯磨き、薬品や化粧品などの容器としてこの搾り出し式チューブが活用されるようになり、需要も自然に伸びていったのである。その便利さから売り込みの苦労をまったく知らずに、多方面からの注文があったようだ。アイデアが成功を導いたのである。大正11（1922）年頃には需要の伸びに対応して設備を拡充し、量産方式を確立し、業務は急速に発展したのだった。一方で、この頃も銅像制作を続けてはいるが、瓦全はむしろこのチューブ製作の事業で大成功を納めていくのである。

IX. 晩年

大正12（1924）年に関東を襲った大震災にも工場は無傷で発展を続け、事業が安定したことを見届けると、瓦全は大正14（1925）年頃、甥で養嗣子の鬼外にすべてを委ね、夫婦で郷里の広島に帰る。広島市観音町（現在の観音本町）に当時珍しい洋館風の大邸宅を建て、悠々自適の生活を始めたのである。絵に描いたような成功者の晩年といえる。この時期にも「早速整爾銅像」（昭和4年）の制作や、時にどうしてもと依頼のあった肖像などの仕事をこなしているが、おおよそ平穏な隠居生活を送っていたのである。ところが、予期せぬ災禍が彼らを見舞う。屋敷のすぐ外で、暴漢に夫婦とも襲われ、瓦全は命を取り止めるが、妻を亡くしてしまうという事件が起こったのである。これを機会に、再び東京に帰り、やはり穏やかな余生を趣味を楽しみつつ過ごしていたが、昭和14（1939）年9月15日、病歿した。68歳であった。墓は東京の本願寺築地別院、和田堀廟所（杉並区永福1丁目）にある。

昭和20（1945）年、終戦直前に工場は栃木県船生に疎開し、製造機械などは損壊を免れるが、本郷にあった屋敷とアトリエは空襲で焼失してしまった。瓦全に関する資料は、この時ことごとく灰塵に帰したという。



⑦ 瓦全が眠る墓

X. おわりに

宇品地区をさらに南へ下っていくと、やがて穏やかな瀬戸の内海風景が広がる。内海きっての良港宇品港がそこにある。かつて宇品新開により広大な干拓地（現在の宇品の町）が誕生し、築港によって海港都市として近代の広島が発展がもたらされたことも事実なのだが、一方で軍用港として活用され、そのことが軍都広島を育て、あの原爆の惨禍にもつながった歴史を思うと、我々は複雑な想いに捕われざるを得ない。そんなこともあってか、宇品築港を果たした千田貞暁のことも、その功績を記念する千田廟公園も、今は人の関心をひくものでなくなったのであろうか。ましてやそこに立つ銅像の作者のことが忘れられても仕方がないのかもしれない。

しかし歴史の篩いから振り落とされ、忘れられようとしている一人の彫刻家宮本瓦全にも果敢でひたむきな確かな足取りがあったのである。木彫家として、ある時は教師として、また銅像作家として、そして工業技術開発者あるいは企業家として大きな振幅を見せながら、どれひとつおろそかにすることなく着実に足跡を残した生涯であった。

不幸にも制作した銅像のほとんどが失われ、展覧会などでの輝かしい榮譽にも恵まれなかった宮本瓦全を彫刻家としてどう評価するかは難しいことかもしれない。しかし僅かに遺された資料から優れた素質を持った彫刻家であったことは窺えたと思う。

またわが国で最初に金属チューブ容器の製造に成功し、日本美術の発展に陰で貢献したことも知った。驚いたことに、宮本製作所はその後、養嗣子鬼外氏からその子息へと受け継がれ、⁽¹⁶⁾ 今日「宮本工業」として今なお金属チューブ容器を中心とした事業が続けられているのである。宮本瓦全の創業からは80年、現在は活用範囲も電子・情報関係にも拡充されるなか、そのユニークな工法は守られながら改良と発展を加え、この業界をリードしてきたという。瓦全の先見の明にあらためて驚嘆するばかりである。

《註》

- (1) 亥三二が明治31年から2年間にわたり赤十字広島支部看護婦養成所の修身の講師として行った道話を自ら筆録、5編の冊子にまとめたものを中心に、歿後明治43年清水俊の校訂で正統2編の『愚翁道話』が刊行された。その後、晩年の宮本二七郎が祖父徳水や父愚翁の事跡をまとめたいと発願し、石川謙の校訂で『愚翁道話 全』として昭和16年再刊された。大学・中庸・論語・孟子の教えを分かりやすく具体的な説話で説いている。再刊の附録には愚翁伝・系図・活動年譜などがあり、また宮本一吉（二七郎の甥）による序文には愚翁の紹介のほか、心学を实践した人格者として二七郎の人柄についての記述があり、参考となった。
- (2) 正確には『宮本愚翁日記抜粹・思ほうし』（広島県立文書館・平成7年）を参照した。愚翁の日記は10冊遺されているようだが、『日記抜粹』は慶応4年から明治13年までの日記を愚翁自ら抜粹整理したもので、県立文書館から公開された。
- (3) 『巨人新人』（中国新聞社編・昭和3年）に「彫塑界の一人・宮本二七郎」という評伝があり、本研究はこれを基礎資料とした。その他、『藝備人物評論』（手島益男著・東京芸備社・大正11年）に「美術家・宮本二七郎君」、『鮑菰』第19号（鮑菰同好社・大正15年）に「県人美術家（三）宮本瓦全氏」、『藝備の人材』（中沖壽著・東邦評論社・昭和5年）に「故山の土に親しむ・彫塑家宮本二七郎氏」、『広島懸先賢傳』（昭和18年）に「宮本二七郎」などの略伝があり、また『広島大百科』（中国新聞社・昭和57年）にも記事があり参考とした。
- (4) 『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇第1巻（ぎょうせい・昭和62年）の130頁に第1回入学生一覧が掲載され、出身校欄に記述されている。
- (5) 『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録』彫刻Ⅱ（芸大資料館・1985年）102頁参照。

- (6) 『中國』（現在の中国新聞）明治30年9月3日・5日・7日・11日の記事
- (7) 『中國』明治30年10月5日の記事
- (8) 『水と共に七十有余年』（三好松吉著）。三好松吉氏は二七郎の教え子であり、姪の婿となり水力タービン製作会社を創立した。
- (9) 『偉人の倂』（二六新報社・昭和3年）は当時の日本各地の銅像を網羅、486基を写真と伝記によって紹介したもので、当時の銅像のほとんどが失われた現在、貴重な資料といえる。
- (10) 『中國新聞』大正2年11月16日・17日の記事
- (11) 『中國新聞』大正4年11月3日・4日の記事
- (12) 『明治の彫塑』（中村傳三郎著・文彩社・1991年）第3章「銅像・その時代的背景」で言及されている。
- (13) 『東京日日新聞』昭和17年5月12日の記事
- (14) 『プレス技術』第11巻第7号掲載の「人物プレス技術史6・宮本二七郎氏」（72～73頁）
- (15) 油絵具の老舗「文房堂」や「王様商会」に製品を卸していたと伝えられる。その後、マツダ絵具・ニッカ絵具・ホルベインとの取引も長いという。
- (16) 二七郎の孫にあたる宮本和穂氏が「宮本工業」の現社長。資料をいただいたり伝聞を拝聴し、多くの示唆を得た。感謝申し上げたい。

* 写真図版②・④・⑤は『偉人の倂』（二六新報社・昭和3年）から、写真図版⑥は『巨人新人』（中国新聞社編・昭和3年）から転載した。

（受理 平成9年10月28日）

宮本瓦全（二七郎）年譜

西暦（和年号）	歳	宮本 瓦全 関 連 事 項	美術・社会一般
1871（明治4）		7月7日心学者宮本亥三二（愚翁）の次男として、 広島市大手町筋六丁目（現中区大手町3丁目）の宮 本邸に生まれる。本名二七郎。	M 4 廃藩置県
1874（明治7）	3	井原家の養子となる。	M 9 工部美術校開校
1878（明治11）	7	広島師範学校付属小学校入学。	M10 西南戦争 M11 フェノロサ来日 M16 工部美術校廃校
1889（明治22）	18	広島県広島中学校に入学。	M22 東京美術校開校
1890（明治23）	19	広島中学校中退、忠海高等小学校副科に移り卒業。	M22 明治美術会創立
1891（明治24）	20	東京美術学校入学。	
1893（明治26）	22	神田旅籠町輸出金属商「三河屋」の食客となる。 東京美術学校で彫刻科を専攻、高村光雲に師事する。 宮本家嗣子観太郎急死したため、宮本家に復す。	M26 大熊「大村像」 シカゴ万博
1894（明治27）	23	東京美術学校彫刻科卒業。一時帰郷するが再上京し、 三河屋の仕事や光雲紹介の欄間を彫る。	M27~28日清戦争 広島に大本営
1895（明治28）	24	広島市から天皇への献納品として木彫衝立を1年半 かけて制作する。	M28 下関条約 M29 美校に洋画・塑 造開設
1897（明治30）	26	9月木彫衝立を広島市会議事堂で公開後、献納。	M31 天心美術院創設
1898（明治31）	27	再上京を志すが、宮本家遺族扶養のため広島に留る。 広島第一尋常中学校図画教師を勤める。4月~11月 広島県職工学校教諭となる。	M31 光雲「西郷像」
1899（明治32）	28		M33 光雲「楠公像」
1903（明治36）	32	3月22日父宮本愚翁、病歿。（大手町西方寺に墓）	M37~38日露戦争 M40 第1回文展 M43 韓国併合 M45.7 明治天皇歿
1909（明治42）	38	奈良県吉野実業学校長となる。	
1911（明治44）	40	12月教職を辞して、上京する。	
1912（明治45）	41	船越衛男爵像の依頼を受け春に着手、9月完成。 本郷駒込神明町（本駒込四丁目）にアトリエを建設。	T 2 天心、歿。 T 3 再興院展 T 3 第一次世界大戦 (1914~18)
1913（大正2）	42	奥村五百子女史（愛国婦人会創立者）像制作。11月 広島市饒津神社公園で船越男爵像除幕。	
1915（大正4）	44	千田貞暁男爵像制作、11月広島市千田廟公園で除幕。	
1916（大正5）	45	三河屋を中心に東京金属株式会社設立され、技師長 を勤める。	
1918（大正7）	47	退社後、友人と搾り出しチューブ製作所開設。 この頃、内藤子爵像（延岡）、森田明棋像（愛知） など制作。	T 8 第一回帝展
1920（大正9）	49	この頃、宮本製作所として独立。	T 9 世界恐慌
1922（大正11）	51	山縣豊太郎飛行士像（鶴羽神社）・佐藤正像（明星 院）制作。	T12.9.1 関東大震災
1924（大正13）	53	【藝備人物評論】（手島益男著）に記事。この頃、 発明した改良チューブ製造機械で成功を収める。	
1925（大正14）	54	この頃、工場を養嗣子鬼外に委ね、広島に帰る。	
1926（大正15）	55	観音町に邸宅を建てる。 【鮑微】第19号（7月）に記事。	T15.12 大正天皇歿
1928（昭和3）	57	この頃、高木幹吾像制作。	
1929（昭和4）	58	【巨人新人】（中国新聞社編）に記事。	
1929（昭和4）	58	早速整爾像制作。	
1930（昭和5）	59	【藝備の人材】（中沖寿著）に記事。	
1931（昭和6）	60	この頃、広島で殺傷事件に巻き込まれ、妻を亡くす。	S 6 満洲事变
1933（昭和8）	62	東京に帰る。	
1939（昭和14）	68	病を得て、9月15日11時15分東京で歿す。（東京和 田堀墓地に墓）	S12~日中戦争 S15 紀元2600年展 S16~太平洋戦争 S17 戦争美術展
1943（昭和18）		【広島県先賢傳】に記事。	S20 8月原爆、敗戦
1945（昭和20）			

Abstract

A Study on Gazen Miyamoto

Shigenori TAKAGI*

Gazen Miyamoto is known as an artist of "The Statue of Sadaaki Senda", one of the few open-air sculptures in Hiroshima which outlived the last war. Though he is regarded as a pioneer of sculpture circles in Hiroshima, the details are little known. In this study, I shed light on his life and investigated his role played in the sculpture world.

He was born in early Meiji era in Hiroshima and started his wooden sculptor career after studying at Tokyo Arts School (present Tokyo National University of Fine Arts and Music) as the member of the first graduating class. After teaching at a technical junior college, he was actively involved again in sculpture and made many bronze statues. His interest was also shown to an industry and he succeeded first in mass production of metal tubes.

Unfortunately, many of his bronze statues were lost during the war but he lived a life of full of ups and downs as a sculptor, a teacher, a developer of industrial engineering or as an entrepreneur and left great achievements steadily devoting his life to each career.

The fact should be recognized more extensively that he played an active original part in the early developing period of Japanese modern sculpture and he indirectly contributed to the development of Japanese arts by enabling domestic production of oil paint colors through the success of metal tubes.

(Received October 28, 1997)

* Department of Fine Arts